

# 当科における平成28年度入院・手術症例の検討

西田 学<sup>1)</sup>      福島 典之<sup>1)</sup>      平位 知久<sup>1)</sup>  
 呉 奎真<sup>1)</sup>      高橋紗央里<sup>1)</sup>      益田 慎<sup>2)</sup>  
 長嶺 尚代<sup>2)</sup>

## 1. はじめに

平成28年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）の、耳鼻咽喉科頭頸部外科・小児感覚器科における入院症例数、手術件数について検討を行ったので報告する。

## 2. 方 法

平成28年4月1日から平成29年3月31日までに当科で入院加療を行った症例、及び入院もしくは外来にて手術を行った症例について入院カルテを用い検討を行った。

## 3. 入院症例

平成28年度における当科の入院症例814例の内訳を表1に示す（以下の症例数はすべてのべ人数で示す）。手術目的での入院患者が547例（67.2%）であった。

次に急性感音難聴が86例（10.6%）、急性炎症性疾患が81例（10%）と続いていた。頭頸部悪性疾患は51例（6.3%）であった。眩暈は17例（2.1%）であった。ベル麻痺、ハント症候群などの末梢性顔面神経麻痺は13例（1.6%）であった。

平成27年度から導入した高気圧酸素療法によって、平成27年度とほぼ同等の急性感音難聴の入院件数が保っていた。

症例数の多かった急性炎症性疾患の詳細に関して検討した。急性炎症性疾患による入院患者81例の内訳を表2に示す。急性扁桃炎・扁桃周囲炎・扁桃周囲膿瘍といった炎症性疾患が42例と最も多く、急性咽頭喉頭炎、急性喉頭蓋炎、急性唾液腺炎と続いた。その他は声門下喉頭炎や咽後膿瘍等であった。

悪性腫瘍患者51例の内訳を表3に示す。唾液腺悪性腫瘍が10例と最も多く、下咽頭悪性腫瘍・悪性リンパ腫が9例、喉頭悪性腫瘍が8例、甲状腺悪性腫瘍が8例、中咽頭悪性腫瘍が4例であった。

表1 平成28年度入院症例の内訳

手術目的	547
急性炎症性疾患	81
頭頸部悪性疾患	51
急性感音難聴	86
眩暈	17
顔面神経麻痺	13
その他	19
合計	814

表2 急性炎症性疾患患者の内訳

扁桃炎・扁桃周囲炎 扁桃周囲膿瘍	42
急性喉頭蓋炎	10
急性咽頭喉頭炎	11
急性中耳炎	0
急性副鼻腔炎	1
頸部膿瘍	3
急性唾液腺炎	4
その他	10
合計	81

表3 悪性腫瘍患者の内訳

喉頭悪性腫瘍	8
上咽頭悪性腫瘍	1
中咽頭悪性腫瘍	4
下咽頭悪性腫瘍	9
甲状腺悪性腫瘍	8
舌悪性腫瘍	0
鼻副鼻腔悪性腫瘍	0
外耳・中耳悪性腫瘍	1
唾液腺悪性腫瘍	10
悪性リンパ腫	9
原発不明	1
合計	51

1) 県立広島病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

2) 県立広島病院 小児感覚器科

#### 4. 手術症例

平成28年度において、当科では890例の手術を行った。手術部位による内訳を表4に示す。

鼻副鼻腔手術が346例と最も多く、次いで鼓室形成術、鼓膜形成術、鼓膜換気チューブ留置術、顔面神経減荷術などの中耳手術が201例であった。口蓋扁桃摘出術などの咽頭手術が148例、頸部手術が128例、喉頭微細手術が43例と続いた。その他に先天性耳瘻管摘出術などの外耳手術や人工内耳挿入術なども行った。

表4 平成28年度の手術件数

外耳手術	16
中耳手術	201
咽頭手術	148
鼻副鼻腔手術	346
頸部手術	128
喉頭微細手術	43
口腔手術	2
人工内耳	4
食道異物	2
合計	890

表5 中耳手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
真珠腫性中耳炎	乳突削開術・鼓室形成術	80
慢性中耳炎	鼓室形成術	56
中耳奇形	アブミ骨手術・鼓室形成術	10
顔面神経麻痺	顔面神経減荷術	2
慢性滲出性中耳炎	鼓膜チューブ挿入術	51
その他		2
合計		201

表6 鼻副鼻腔手術の疾患と術式

疾患	手術	件数
慢性副鼻腔炎	内視鏡下鼻副鼻腔手術	124
術後性頬部嚢胞	内視鏡下鼻副鼻腔手術	2
鼻中隔彎曲症	鼻中隔矯正術	103
肥厚性鼻炎	粘膜下鼻甲介骨切除術	107
眼窩壁骨折	眼窩底骨折観血的手術	2
その他		8
合計		346

またそれぞれの部位で詳細に分類したものを表5～8に示す。

中耳手術201例の内訳を表5に示す。真珠腫性中耳炎が80例と最も多く、慢性中耳炎が56例、慢性滲出性中耳炎が51件、中耳奇形が10例、顔面神経麻痺が2例であった。

鼻副鼻腔手術346例の内訳を表6に示す。疾患別にみると慢性副鼻腔炎が124例、肥厚性鼻炎が107例、鼻中隔彎曲症が103例であった。鼻中隔彎曲症に対する鼻中隔矯正術・肥厚性鼻炎に対する粘膜下鼻甲介骨切除術は単独もしくは併用で行うこともあったが、概ね慢性副鼻腔炎の治療と同時に施行する症例が多かった。

咽頭手術148例の内訳を表7に示す。慢性扁桃炎・扁桃病巣感染症・睡眠時無呼吸症候群に対して109例の口蓋扁桃摘出術、アデノイド増殖症に対して28例のアデノイド切除術を行った。

頸部手術128例の内訳を表8に示す。気管切開術や気管口拡大術が40例と最も多かった。次いで頸部リンパ節や頸部腫瘍の生検28例、耳下腺腫瘍摘出術が19

表7 咽頭手術の疾患と術式

疾患	術式	件数
慢性扁桃炎など	口蓋扁桃摘出術	109
アデノイド増殖症	アデノイド切除術	28
その他		11
合計		148

表8 頸部手術の疾患と術式

疾患	手術	件数
顎下腺腫瘍、唾石症	顎下腺摘出術	6
耳下腺腫瘍	耳下腺部分切除・腫瘍摘出術	19
甲状腺手術	甲状腺切除術	10
喉頭腫瘍	喉頭摘出術	0
悪性腫瘍頸部リンパ節転移	頸部郭清術	1
正中頸嚢胞	甲状舌管嚢胞摘出術	1
頸部腫瘍	リンパ節生検・頸部腫瘍生検	28
呼吸不全・気管口狭窄	気管切開術・気管口開大術	40
誤嚥性肺炎	声門閉鎖術	5
嚥下障害	嚥下機能改善術	3
声帯麻痺	喉頭形成術	5
その他		10
合計		128

例、甲状腺手術が10例であった。

平成27年度から積極的に外来日帰り手術を行うようにしたことにより、平成28年度も手術件数890例のうち93例（10.4%）は外来日帰り手術であった。慢性滲出性中耳炎に対する鼓膜チュービングが41例と最も多かった。次いで喉頭微細手術が11例、頸部リンパ節生検が10例であった。

## 5. 考 察

平成28年度の耳鼻咽喉科頭頸部外科・小児感覚器科における入院症例は814例であったが、そのうち547例（67.2%）が手術目的での予定入院であった。平成27年度より入院症例・手術症例ともに減少していた。しかし平成26年度までは入院件数が手術件数を上回っていたが、平成27年度からは手術件数が入院件数を上回っている。これは外来日帰り手術を積極的に行うようにしたことが要因と考えられる。

また鼻副鼻腔手術の症例数は増加の一途であり、ナビゲーションシステムの導入によってより安全な鼻副鼻腔手術が可能となったことが要因と考えられる。

真珠腫性中耳炎や慢性化膿性中耳炎などに対する鼓室形成術が適応となり得る症例に関しては、県内外問わず紹介が多い。当科では外耳道削開型鼓室形成術・外耳道再建術を行っており、術後も最低5年は経過観察することによって良好な治療成績・再発予防に努めている。また手術適応に関して、聴力機能や耳漏の状態と患者とよく相談しながら検討している。このような術後を含めた長期フォローを長年していることが、手術件数を多く維持できているものと考えられる。

今後も当院での症例の統計的検討を継続し、さらなる治療成績の改善に結び付けていきたい。

## 6. まとめ

- 1) 平成28年度の入院症例は、814例であった。
- 2) 手術目的での入院が547例と最も多く、以下急性感音難聴86例、急性炎症性疾患81例、頭頸部悪性疾患は51例、眩暈17例、末梢性顔面神経麻痺は13例であった。
- 3) 急性炎症では急性扁桃炎・扁桃周囲炎・扁桃周囲膿瘍が42例と最も多かった。
- 4) 悪性腫瘍では、唾液腺悪性腫瘍が10例と最も多かった。次点で下咽頭悪性腫瘍・悪性リンパ腫9

例、喉頭悪性腫瘍8例、甲状腺悪性腫瘍8例と並んだ。

- 5) 手術件数は、全体で890例であった。鼻副鼻腔手術が346例と最も多く、中耳手術201例、咽頭手術148例、頸部手術128例、喉頭微細手術43例であった。
- 6) 中耳手術に関して、真珠腫性中耳炎が80例と最も多く、慢性中耳炎56例、慢性滲出性中耳炎51例、中耳奇形10例、顔面神経麻痺2例であった。
- 7) 外来手術は93例であった。外来手術の増加に伴い、平成27年度から手術件数が入院件数を上回る状態が続いている。

## 7. 参考文献

- 1) 福入隆史, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 宮里麻鈴: 当科における平成15年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌36: 107-111. 2004
- 2) 呉奎真, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 福入隆史: 当科における平成16年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌37: 201-204. 2005
- 3) 羽嶋正明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 呉奎真: 当科における平成17年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌38: 155-158. 2006
- 4) 尾野里奈, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 羽嶋正明: 当科における平成18年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌39: 162-165. 2007
- 5) 羽嶋正明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 片桐佳明: 当科における平成19年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌40: 189-193. 2008
- 6) 片桐佳明, 福島典之, 小野邦彦, 平位知久, 羽嶋正明: 当科における平成20年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌41: 115-119. 2009
- 7) 久保田和法, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明: 当科における平成21年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌42: 149-152. 2010
- 8) 久保田和法, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明: 当科における平成22年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌43: 125-129. 2011
- 9) 高原大輔, 福島典之, 平位知久, 中下陽介, 片桐佳明: 当科における平成23年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌44: 85-89. 2012
- 10) 岡林大, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 高原大輔: 当科における平成24年度入院・手術症例の検

- 討, 広島県立病院医誌45: 71-73. 2013
- 11) 有木雅彦, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 吉賀綾子: 当科における平成25年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌46: 69-72. 2014
- 12) 有木雅彦, 福島典之, 平位知久, 宮原伸之, 吉賀綾子: 当科における平成26年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌47: 71-76. 2015
- 13) 高橋紗央里, 福島典之, 平位知久, 呉奎真, 有木雅彦: 当科における平成27年度入院・手術症例の検討, 広島県立病院医誌48: 77-80. 2016

## **An investigation of the number of hospitalized and surgical patients at the Department of Otolaryngology, Hiroshima Prefectural Hospital.**

Manabu Nishida, Noriyuki Fukushima, Tomohisa Hirai, Keishin Go,  
Saori Takahashi, Shin Masuda, Hisayo Nagamine

Department of Anesthesiology, Hiroshima Prefectural Hospital

### **Summary**

Every year, the Department of Otorhinolaryngology, Head and Neck Surgery and the Department of Pediatric Sensory System at Hiroshima Prefectural Hospital report on the number of hospitalized patients and surgeries per year. In this study, we report on the number of hospitalized and surgical patients at our department for financial year 2016 (from April 1st, 2016 to March 31st, 2017) along with some discussion.

Both the number of hospitalized patients and surgeries were lower than financial year 2015. However, since FY 2015, the number of surgeries has exceeded the number of hospitalizations and it is our belief that the main reason for this decrease is due to the fact that we started conducting increasingly more ambulatory day surgeries. In addition, the number of cases of paranasal sinus surgery has continued to rise, with safer surgeries enabled by introducing a navigation system. The number of referrals for surgery for the middle ear remains high both from within and outside of the prefecture. We believe that striving to achieve good treatment results and prevent recurrence by examining surgical indications and carrying out careful postoperative follow-up will lead to the successful maintenance of the number of surgeries.